

Title	ハイデッガーに於ける超越の問題：時間性よりする存在の構成
Sub Title	Problem of transcendence in M. Heidegger : Ausbildung des Seins aus der Zeitlichkeit
Author	立野, 清隆(Tateno, Kiyotaka)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1952
Jtitle	哲學 No.28 (1952. 3) ,p.129- 158
JaLC DOI	
Abstract	This essay is the first part of my study on Martin Heidegger arranged in four chapters, Limits of space do not allow me to print the fourth chapter in which I have philosophized and developed the fundamental problem of his philosophy, "die Ausbildung des Seins aus der Zeitlichkeit", and here in this issue I am to publish the first three chapters. The three chapters, explaining "Zeitigen der Frage nach dem Sein" which he clarified in the first part of his "Sein und Zeit," as well as in Other books of his, are nothing but the preliminary step to the fourth chapter which develops itself with unique logic, independent from the traditional method of meiaphysics. Thus they will be completely founded for the first time after the description of the fourth chapter.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000028-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ハイデッガーに於ける超越の問題

— 時間性よりする存在の構成 —

立野清隆

一、序論

我々の最も一般的且つ日常的な真理欲求は、すべて真理に対する一定の確信乃至は信仰を前提とし、此の確信の増大への意志として存在する。仮令此の確信そのものは真理ではなくとも、かかる確信を増大し得るもの、そして之のみが、始めて我々にとつて追求する価値のあるものとなつて現前する。かくの如く真理は本来純粹に客観的な真理意志からして、即ち何等の效果もなき純粹にして冷厳なる真理への意志として求められずに、或る信仰から、即ち我々の生に於ける最も強力なる肯定の場所たる、一定の氣分的確信の世界からして欲求せられる。心理的には氣分Stimmungとして、倫理的には傾向性 Neigung として特徴附けられる此の包括的、衝動的に開けた確信の世界を、我々は人間存在に於ける情態性 Befindlichkeit と名附けよう。

我々は存在する限りその都度既に一定の氣分的な情態性に於て在るものとして、情態性は人間の自然を構成し人間の全ての可能性を根柢的に打ち貫き、我々の存在意識の全体的な基礎であり、根源であり、又その限界でもあり、我々の

ハイデガーに於ける超越の問題

如何なる問も此處より發し、且つ此處に於て答へられる。寔に情態性こそは、存在の全体に対する肯定と否定との決定的な生ける地平であり、従つて人が如何なる哲学を選ぶかは、その人が如何なる情態性に於て在るかに依存すると云へよう。情態性自らは然し通常、我々と共に不斷の生成的流動の過程に於てある不確実なるものであり、それ故にこそ不確実なる自然的情態性は、確実なる真理に於て不確実なる自らを、恒常的に繋ぎ止めようと意志する。確実性への欲求としての真理意志は、包括的に開けた確信的世界の崩壊、絶対的不確実性に対する恐怖より出発したものに他ならない。かくて日常性に於ける真理に対する信仰としての自然的情態性の確信的理解は、自己存在の恒常的持続への意志として、「それを所有して居れば人間が最も幸福に生きられ得る、世界と人生との認識は如何なるものか」と言ふ企投的な幸福意志に依つて規定せられ得る。従つてそれは必然的に、不確実にして何等の效果もなき認識に對しては無関心に、有害な且つ破壊的な真理に對しては敵意を持つものとして、我々の真理探究の衝動はその第一歩に於て既に虚偽への危険性に立つ。自然的情態性より發して現前化せしめられる真理はその都度、既に、人間の恣意的な価値概念の賦与に依つて歪曲せられて丁つてゐるのである。かくの如く真理が一定の効果、権力、信仰の為の手段として、總じて幸福意志による支配として求められる處、常に危險に曝されざるを得ない。同様に或る真理に対する悦びの経験、真理に依つて得られる幸福も決して真理の基準ではあり得ない。真理獲得の歴史は之に對して、寧ろ我々に自己の全生存を認識の実驗者として、最も苛酷且つ危険なる奉仕のうちに、一步々々戰ひ取るべきものであることを教へ、何よりも之に堪へ抜く魂の偉大さと、強力なる感情——優れた情態性を必要とする事を告げる。そこに在つては有害であるとか破壊するとかいふことは、有益であるとか建設するとかいふことと同様に認識者の本質に属すると云へよう。

人間が此の自然的情態性に於て單に生き永らへて行くといふ生活の無疑問性に抗して、「存在とは何か」と問ふこと

は、人間が諸他の自然的存在者と異なる自由存在者なることを証せんとする根源的行為であり、生成的流動の世界（変転極まりなく過ぎ去つて行く存在者の世界）の絶対的否定に依つて、存在を全体的に創造せんとする、神的なる人間の本來的生起であり、さうして更に、「生成」として在つて「存在そのもの」としてではない自然的世界にとつては、寔に驚嘆すべき反自然的出来事なのである。従つて本來的なる存在の問題は、断じて永遠不変なるものとして眼の前に存在し、概念的に伝承せられ得るが如きものではなくして、自然との無差別的合一性を欲する、人間の自然的情態性たる幸福意志からの、その都度新なる奪取としてのみ存在する。

存在（真理）にとつて本質的に非真理である、生成としての自然的世界（存在者の世界）に在つて、真理への奉仕（存在を企図すること）は最も反自然的なるものであり、かくて全き眞実への意志こそ人間に於ける最も本源的なる行為であり、此の仮借なき真理への情熱が、科学的対象論理の立場を突き抜けて自らの自然的情態性へと還帰し、自己自らをも一箇の疑問符と化せしめることによつてその絶頂に達する。眞實性そのものの齎らす危険は、此處に我々を無地盤的深淵の前に導く。

日常性に於ける人間の自然的情態性とは幸福意志であり、幸福意志の支配する処真理は常に隠蔽せられ、かくて真正なる真理意志とは、幸福意志として規定せられる日常的情態性からの、不斷の奪取によつてのみ獲得せられる、特異の情態性に根差すことが明らかにせられた。然し乍ら我々が此處に云ふ反自然性とは、決して自然性と対立した意味に於ける、單なる不自然性を意味するものではない。不自然性とはそれ自身、自然性の反対として相對的に自然性によって規定される自然的なるものに過ぎない。之に対して反自然性とは、自由なる主体としての我々が、自然を強要して我々の問ひに答へしめる積極的なる行為として、自然性を拒否することも、反対に不自然性を許容することもある

り得るといふ、總じて自然的なるものの全体を、絶対否定的なる無関心として受取る関心に於て、自然に対する超越として生起する。かくて自然的生に対して超越することは、決定的に危険への意志となり、哲学すること一般は自然的情態性の全き外に立ち、危険の中に存在することを意味する。自然的傾向性から我々を隔離する距離を絶えず維持せしめ、困難や嚴しさや欠乏に対し、否生に對してすら益々無関心的となることを強要する存在への意志は、人間の最高の情態性として、最高の反抗が絶えず克服せられる悲劇的場所に於て生起するものなることを告知する。「自分の父の殺害者であるエディブス、自分の母の夫たるエディブス、スファインクスの謎の解決者たるエディブス、此の運命的行為の不可思議なる三位一体は何を我々に語るのであるか。自然の本来の魔力が予言的な力によつて打ち破られんが為には、恐るべき反自然性が、その原因として先行しなければならないといふことをであるか。といふのは若しも人々が自然を克服するのでなければ、換言すれば反自然的なものに依るのでなければ、如何にして人々は自然に對してその祕密の放棄を強要し得たであらうか。恐らくは強要し得なかつたであらうからである。……自然の謎を解くその者は又、父の殺害者として、母の夫として、最も神聖な自然秩序を破壊しなければならなかつたのである。慥かに此の神話は、知慧即ちディオニュソス的知慧こそは反自然的な怖ろしいものであるといふことを、自己の知によつて自然を深淵の中へ突き落す者は、又同時に自分自身に於て自然の解消を経験しなければならぬといふことを、我々に囁かうとするかの如くに思はれる。^{註一} ニーチェの此の言葉の中には、認識の悲劇的出発と名附ける夫の真理への奉仕の為に、最後の声迄も認識の歎声と化せしめんとする深き決意が語られてゐる。哲学的根本情態性は、反自然性たることを決意する最高の苦悩への意志であり、生存の全體的な肯定の状態として、生の最も疎遠且つ苛酷な状態の只中に在り乍ら、尙敢へて存在の建設そのものの創造的な快樂と共に、存在の破壊への快樂も自己のうちに包み入れつゝ、

自己の無尽藏性を歓喜する、悲劇的情態として規定することが出来よう。

常に新なる距離拡大への熱情、益々高く、益々遠く、益々広く飛翔する目的なき超躍的進行への衝動、幸福乃至平和をも含む凡ゆる束縛の端的なる否定、全体的なるものに対する嵐の如き情熱と沈默的なる不安、非全体的なるものに対する無関心的単純さ、軽快にして奔放、大胆にして清朗、涯しなき懷疑と鮮明なるロゴスへの憧憬との交錯せる異様なる靜寂、之等の諸情態は興奮なき魂の新鮮なる謎の如き情態と共に、ディオニュソス的情態性にとつて本質的なものであり、かゝるディオニュソス的情態性を仮借なく肯定することの中に、存在の根源は清澄にして冷厳なる光と空氣の中に輝き、そこでは最早や、霧で蔽ふことも、ヴュールを被ることも許されず、事物の本性は粗野にして生硬、不可避的なる明確さを以て現出する。存在の此の餘りの明るさは我々に奇異の感を喚び起し、驚きつゝ我々は存在とは何か、と問ふ。超越することの根本的生起が哲学することとして遂行せられたのである。

学としての哲学とは畢竟、ロゴスを媒介として自己自らの窮極的な根本的情態性に到達せんとする、哲学以前に於ける一つの試みであるに他ならぬ。

二、存在の生起と後退（存在問題の発生）

ミニトス的沈黙を破つて語り出た存在への問が、明朗にして高貴、聊かの隠蔽も虚偽も曖昧さをも許さず、清澄さそのものともいふべきイオニアの自然に於て發せられたことは意義深い。爾來此の問が、所謂ギリシャ悲劇時代の驚くべき巨人達によつて、壯大な孤独のうちに維持され精練せられて、哲学の唯一にして窮極的な課題を形成し、ギリシャ哲学と誇らかに銘打つ茫漠たる大河となり、西洋哲学史の根柢を脈々として貫流するに至る。寔に彼等による哲

学の生起は、始源乃至は原歴史と呼ばれるに相應はしき或る完璧さを持つ。此の完璧なる始源の持つ明るき本質を、「問ひつゝ立ち止る」彼等の偉大且つ單純なる自己決定に於て追窮し、之を明白なる直觀に齎らることは、爾後の我々の探究の為の、先行的理念の先取としての意義を担ひ得るであらう。

我々が今日手にすることの出来る詩句の如き幾つかの断片と、冬空の如き沈黙に包まれ、高く厳しく聳立つ孤独の明るさに満たされた彼等の伝記とを繙く時、我々のうちに在つて既に異常なる何ものかが生起する。

彼等が神々しき野性に満ち、驚きつゝ、問ひかけたものは存在の全体であり、万物の根源、運命的なるものの根拠に關してであつた。問は問ふ毎に全体自身であり、自己自らも亦常に問はるべきものとして問ひの只中に立つ。彼等に在つても実在とは生成的流動の世界、須臾も止ることなき純粹持続の直觀であつた。然し彼等は此の即自 *an sich* としての時間的直觀の朦朧たる曖昧さに自己を失はず、恐れ氣なく純粹持続をば、存在者の生起と滅亡との歴史的交替として直視し、之を「存在を得て存在を失ふ」と名附け、且つ「生成には有るものも有らぬものも必要であり、是等が協力する場合にのみ生成が結果する。」と表象した。此處に我々が裏に異常なる何ものかと呼んだところのかの「根源」が存する。即ち彼等に在つては存在といふ名称は、生成の全体的な否定として端的に生成と対立する概念であり、自己否定的に生成へと帰り来つて同時に之を包括する概念として（存在を得て存在を失ふ）、生成的実在たる事象そのものに問ひつゝ立ち向ふ人間実存の、唯一の全体的な方法として捉へられたのである。存在の此の至純なる超越的表象化作用に基づいて、渾沌たる生成界は存在者の劃然たる歴史的現象として全体的に把握可能となる。水と言ひ、無限定と名附け、火と呼び、或は存在に、或は数に、或は四元に、彼等は生滅する流動的実在を存在へと限りなく開きつゝ、帰り来つて之を存在の根拠そのものとして全体的に取り返し、夫々の名称を与へ得たのである。

存在の此の方法的遂行そのものこそ我々が超越と呼ぶものに他ならない。・

存在現成の此の始源の時を守りつゝ彼アナクシマンドロスは言ふ。「凡ゆる人間を評価する正しい規準は、元来彼が決して存在すべきではない実在であつて、その多種多様な苦しみと死とによつて、その存在の罪滅ぼしをする者である」とのことである。我々はかかるものから何を期待することが出来るか。抑々我々は總べて死刑の宣告を受けてゐる罪人ではないであらうか。我々は第一には生により、第二には死によつて自らの生誕の罪滅ぼしをするのである」。見ることが直ちに色を見ることであり、聞くことが直ちに音を聞くことである如く、人間の存在が直ちに存在への意志（存在企投 *Entwurf des Seins*）として超越的否定的に、生成的流動の世界と対立する限り、我々の存在はそれ自身虚偽であり、罪人ではないであらうか。然し「一體兎に角既に全く永遠の時間が経過した以上、何故總べての生成物が既にすつと以前に滅亡してゐないのであるか。更新されて留まらぬ生成の流れは何處から來るのであるか。」と問ひ返す。生成と存在との間を蔽ふてゐる神祕的暗黒の中へ、アナクシマンドロスを越えて、電光の如き光明を以て照破したヘラクレイトスは、かくして「此の世界、總べてにとつて同じ此の世界、之は何の神が造つたのでもなければ、何の人間が造つたのでもなく、定まつた丈燃え、定まつた丈消え乍ら、いつもあつたし、今もあり、又何時迄もあるだらう」。「余は生成を觀照するのであるが……余の直觀するのは、生成したものの处罚ではなくて生成の権利附けである……」。「決して没することのない者（存在企投）を前にして、人はどう身を晦ますことが出来得よう。……智は只一つ、すべてを通じてすべてを操つる如き一つの意志を認識することに他ならない」。ヘラクレイトスの直觀寔に恐るべきものと言はなければならない。学説に於てヘラクレイトスと著じるしく相違するに拘らず、パルメニデスも亦同一の根本経験に立つて祈願する。「汝等神々よ、只我に許すに確実性を以てせよ。それが不確実の

大洋中に浮ぶ、身を横ふるに過ぎない唯一葉の板なりとも。凡ての生成する繁茂せる、雜多な、開花し、偽瞞し、魅惑する生けるものは、総べて之等は汝等にのみ取り置き、我には只一箇の貧しき空なる確實性に過ぎずともそれを与ぐよ」と。思惟 noein と存在 *einai* との同一の体験は、存在現成のかゝる嚴しき遂行に於て達成せられたものであり、かくて存在するものは同じく存在者たる人間に自らを開示し、人間は又存在する物の思惟的直観に於て、自らを存在する物に對して開くに至つたのである。存在そのものの明るき本質に迫られて、その近みへと歩み寄つた之等哲学者達は、超越の此の始源の持つ、絶対否定的なる根源的時間性格を、深く内面的に自覺して行つたのである。

生成的流動そのものとして、自らは生成も滅亡も、總じて流動そのことさく知らぬ、無の渾沌、盲目的なる意志ともいふべきディオニュソス的实在を、存在の全体的なる否定として、即ち存在者として表象され措定され得るもの的一切の否定にかかる生成的实在をば、存在の全体的なる否定として、即ち存在者として表象され措定され得るもの的一切の否定たる、無の端的なる無化作用そのものとして、停滯せる存在を全的に打ち碎き又打ち碎きつゝ、逆に自らを全体的存在の限りなき追窮の意志、ディオニュソス的認識意志へと昇華して行つたのである。ディオニュソス的生成界は茲に、生成の絶対的否定によつて現成した絶対的存在（絶対的存在とは存在であつて絶対に生成ではないといふ否定的意味である）と対立して「神に於ける自然」die Natur in Gott を構成し、存在の全体を目指す飽くなき認識意志としてアポロ的明るさを堪へつゝ、自らを明るさそのものの根源として、始源の時間に於てその深き深淵を明け放つたのである。我々は此の暗きものそのものともいふべきディオニュソス的实在が、存在との絶対否定的なる対立的結合に於て、一切の明るさを可能ならしめる明るさそのものの根柢に転ずるその瞬間を、永遠が時間に侵入する瞬間と區別して、差当つて始源的時間に於ける「絶対的今」と呼んで置かう。超越の根本構造を形成して時熟する此の始源的時間

に於て、存在を得て存在を失ふ生滅の過程的全体は、明るさに包まれて全体的表象となり、存在そのものの高まりアボロ的明るさを以て実現する。換言すればディオニュソス的意志は、始源的時間の「絶対的今」の持つ明るさに於て、自らを盲目的なる生成、渾沌たる無、メーイオンとしてある以前に、既に全体的存在を目指す認識意志そのものとして、アボロ的明るさの許に、又その中に限りなく明るみつゝあつたものとして自覺する。

ディオニュソス的なるものよりのかくの如きアボロ的なるものの現成、それは又エオン das Sein の本来の意義でもなければならぬ。即ちエオンとは、永遠に満されざるディオニュソス的意志の、無限の欠乏を意味するものとしてのメーイオン das Nichts を、エオンの事実的存在的被投的根拠とし、他方かゝる意志が、飽くなき認識意志として、根源（メーイオン）の全的なる存在開示を渴望する限り、無の絶対的否定として絶対に開かれた存在そのものを、エオンの存在可能の企投的根拠と為し、かく両根拠は相互絶対否定的に対立しつゝ、エオンの本質を構成し、隠蔽せられてゐた根源、メーイオンの意志を、凡ゆる渾沌から解き放つて、存在の全体的顯現を「絶対的今」に於ける真理として時熟せしめる。従つて最も本源的なる意味に解されたるエオン das Sein にとつて、メーイオンとその絶対的否定たる存在と、かくして現成する真理とは、夫々異なる時間限定を持てる儘に於て互に構成的であり、エオンとは之等三要素の絶対否定的統一たる始源的時間性の、「絶対的今」に於ける全体的顯現を意味する。三要素の否定的綜合統一としてのディオニュソス的認識意志は、一方如何なる光よりも更に輝けるアボロ的存在を、かゝる認識意志全体の可能性の根拠として目指すと共に、他方如何なる暗黒よりも更に暗き深淵、メーイオン das Nichts を、認識意志全体の事実的根拠として把持する。一方なくしては他方もなく、従つて又全体もあり得ない。二者は等根源的なるものとして、絶対否定的に対立しつゝ、愈々鋭く相互の独立性を保持すると共に、又絶対に相互を要求して相離れることもな

く、全体の否定的なる統一を「ある」と名附けて「絶対の今」に於て打ち開く。我々は存在 das Sein の此の否定的統一に於ける命名的現成を超越と名附け、その根本構造を始源的時間として規定した。超越のかゝる根本構造は更に立ち入つて吟味せられなければならぬ。

一方に於てディオニュソス的なるものとしてのメーオンを、超越の事実的存在の事実的根拠となし、他方に於てアポロ的なるものの可能の根拠としてのエオン（メーオンの絶対的否定性そのものとしての存在）を、超越の事実的存在の可能の根拠としつゝ、相互の絶対的否定の否定的統一としての意味を持つ「絶対的今」とは、それ自身全体的存在の純粹なる実現として、端的にそれは「ある」と名附けられた。かぐの如くにして全体的に顕現する存在 das Sein とは併し乍ら、一方飽く迄もメーオン das Nichts の絶対的否定たるアポロ的なるものとして、常に具象的なる像性格を持つものでなければならぬと共に、他方飽く迄もディオニュソス的なるものとして、今そこに形を持つて存在するアポロ的像を、絶対否定的に無化せんとし、全的に打ち碎じて之を、その具象的像性格の儘に拡がり行く全体的な像一般へと高め、かゝる像一般の可能的なる否定的拡がりの、否定的統一表象として、「今」に於ける「そこ」を純粹に全体的具象的なる空間として開くのである。「ある」と名附けつゝかくあらしめられた存在の此の全体的否定的なる拡がりは、絶対に相反する存在の両方向に向つて、無限に動的に拡がり行く開きそのものとして、それ自身存在の絶対的否定性の端的なる肯定そのものであり、Dionysisches Ja-sagen として、自らの生成と共にその没落をも、歓喜しつゝ肯定するディオニュソス的認識意志の、「絶対的今」に於けるアポロ的顯現なのである。従つて現前し来るアポロ的像一般の持つ明るさとは、ディオニュソス的意志によつて不斷に否定さるべきものとして、それ自身有限的であり、未だ絶対に明るまざる明るさそのものの、現在に於ける告知として包み隠す明るさ、自らの中に

絶対に未だ明るまざる暗き深淵を伴へる明るさ、不斷に暗きに向つて明るむと共に愈々鋭く、自らの明るさの中に暗き深淵を対峙せしめる否定的に輝く明るさとして、恍惚的忘我的なる直観乃至は觀想を絶対に拒絶する明るさである。

彼處高みへと開いて光愈々高く輝けば、彼方深淵は愈々深く千古の祕密に満ちて明るんで行く。光へと馳せ深淵へと働きかけ、兩者を絶対否定的に対立せしめつゝ、至高の明るさへと自指して統一する、此の空間的像一般自らの否定的統一の持つ明るさこそ、彼ヘルダーリンが「エーテル」Aetherと呼び、ニーチェが「十月の午後の明るさ」の中に於て直観したものに他ならない。自らを打ち砕きつゝ、存在の全体を目指して「今」「そこ」に明るむかかる空間を、方法論的に「実存的空間」と規定して置かう。

然るに絶対否定的に存在と無とへ拡がれる像一般（存在の全体的認識を目指す始源的時間に於て自らを打ち砕いて可能性に転じたアポロ的個体）の否定的統一として、自らを全体的に顕現する実存的空間が、始源的時間の絶対否定的統一たる「絶対的今」を、全体的なる「そこ」Daとして開くや否や、既に存在と無との対立に於て、絶対否定的に相共に否定せられで現成した実存的空間を保持しつゝ、同時にそれは、「絶対的今」に於ける切斷的、個物化的逆限定として、無に依つて否定せられた個物者（可能性に転ぜられた個物者——実存的空間）を、再び絶対に否定することによる、個物者の取り返しとして、実存的空間は個物者的に存在するに至る。自己自らの可能性を具体的全体的に遂行しつゝ、始源的時間の絶対否定的統一たる「今」に於て、個的に開かれて「そこ」に在る実存的空間を、我々はハイデガーに従つて「現存在」Da-seinと名附け、その個的限定を「実存」Eik-sistenzと規定しよう。「現存在の本質はその実存に存する」。実存とは、渾沌たる絶対の無（存在の絶対的否定の謂）が自らを絶対に無化すること

とに於て、無ならざるアポロ的個体を生ぜしめ、之と絶対否定的に対立することに依つて、自らを存在の全体的開示を目指すディオニュソス的認識意志として自覺し、かくてアポロ的個体を全的に打ち碎きつゝ、その窮極的な完成を実存的空間に於て達成するや、自らを「今、そこ」に開かれた実存的空間（存在の全体的開示の可能性そのもの）に於て、実存するディオニュソス的認識意志として、死復活を遂げたものに他ならない。それは又惜しみなき自己費消によつてその窮極に達したアポロ的個体が、実存的空間を開きつゝ自らをディオニュソス的認識意志として自覺することによつて、「今、そこ」に取返し得た絶対的なる個体、歴史的実存である。かくの如くにして達成せられた存在の全体とは、一方に於て存在を得て存在を失ふ存在の全体的顯現たる実存的空間であると共に、他方かゝる全体的存在の実現が、瞬間的であるのでも終りなき無限の持続の間でもなく、實に両者の何れをも越えて、存在の全体的開示を遂行するディオニュソス的認識意志の無限の持続を、惜しみなく費消して之を永遠に失はしめることによつて死復活を遂げる。夫の永劫回帰の瞬間、存在を得て存在を失ふ存在の眞の全体的持続可能性の全体的顯現たる、実存の本質現成の瞬間「絶對的今」に於てなのである。かくして飽くなきディオニュソス的認識意志は、自らの内的必然性を全体的に遂行し來つて、その目指す窮極的なアポロ的實現を、即ち存在を得て存在を失ふ存在の全体を、存在を得て存在を失ふ歴史的存在者の全体的なる現成の瞬間に於て、かゝる今を存在の全体の永劫的恒常の拡がりによつて満しつゝ決定的に完成ししのである。

ディオニュソス的認識意志の目指したもの、それは自らを絶対に否定してその全き外に立つ個的なる実存的空間、現存在を実存せしめることに他ならなかつたのである。

以上に於て我々は存在問題の由來の高貴さと嚴肅さとを、存在の時間的本質現成としてアポロ的個体を完成せしめつゝ、自らの最高の死を死するディオニュソス的認識意志の、本源的なる遂行そのものに於て示し得た。現存在の實存と共に存在の全体は、かくも全体的に自己自らに於て顕現せられて立つてゐる。然も自らの此の完成を、過去的に振り返つて見ることが出来るといふことの自由の中に、即ち反省的思惟による現前化的取り返し（表象）が可能であるといふことの中に、既にオルフォイスの持つ危険が藏されてゐたのである。誘惑は今や決定的である。寔に存在はその過去性に於て振り返り見られる時、既に完成し乍らアポロ的なるものの全体として、一切のディオニュソス的なる未来的認識意志を絶対に否定しつゝ之を、過去的非創造的なる觀ることの中に全く解消し尽くす、包括者 *das Umgreifende* 的存在となり了るのである。觀ることの中で此の包括者の存在は、最も一般的且つ自明的なる概念として、最早や定義附けは絶対に不可能であり、此の自明の蒼白さに色褪せ、無の如き空虚なる一般性の中へと沈み込む存在の包括的地平の持つ明るさの中で、存在者は存在ではないものとして、その存在者性に於て現前化的に決定せられ、同時に存在者として惹き起され開示せられた自己自らに對して、超越的に對立することを可能ならしめるのである。存在者の此の現前化的近接の苛藉なき銳さこそ、存在一般への問ひを打倒して、存在者そのものへの問ひへと転換せしめて行つた、存在の後退的近接に他ならない。かくてその由來の高貴さと嚴肅さとを持つた存在問題は、アポロ的個体の現前化的完成を目指す後期ギリシャ時代に於て、早くも一つの独斷へと形成せられて行つたのである。存在は存在の全体的顯現として、明々白々裡に現象する存在者と共に、既に自己自らに對してイデア的に開かれて了つて居り、存在の意味に關する問ひを改めて立て直すといふやうなことは、一つの全く余計なこと、常軌を外した無意味なことに過ぎないとされるに至つたのである。存在の此の過去的自明的なる全体的顯現の性格は、中世に至つて

宗教的ヴェールを被せられ、爾來今日に至るまで二千年の長きに亘る、形而上学の全歴史（存在の夜の歴史）を支配し続け来つたのである。一切の価値の転換を試むべく、鉄鎌を以て思索し続けたニーチエの權力意志の形而上学も、マルクスの史的唯物論と同様、存在の夜の歴史の中に於ける最後の試みに止まつたのである。

三、存在問題の展開と完成

存在するものとは何かといふ伝統的形而上学的な問ひから一步進んで、「存在とは何か」といふ問ひを提起したハイデガーは、之によつて形而上学の全歴史に終止符を打ち、人間存在にその窮屈の可能性を提示しようとしたのである。「存在者そのものは何かといふ問ひの中では、一般に存在者を存在者にまで規定してゐるものに就いて問はれてゐる。我々はそれを存在者の存在と名附け、それへの問ひを存在問題と名附ける。存在問題は存在者そのものを規定するものに就いて探究する。此の規定するといふことは、かくかくとして解釈され概念的に理解される、その規定の如何に関する認識せらるべきである。然し存在者の本質的な規定性が、存在に依つて理解し得る為には、規定することそのことが充分に把握されなければならない。存在者そのものではなくして先づ第一に、存在そのものが予め理解されなければならない。存在者そのものへの問ひの中で、既に予め理解されてゐる存在とは何を意味するのか。^{註三}

存在問題に於て問はれる存在 das Sein は、概念的抽象的作用の極限に於て得られる最も普遍的な概念としてのそれではなくして、具体的な個々夫々の存在者を、かく存在者にまで決定してゐるその存在性である。従つて存在一般への問ひとは存在者を存在者たらしめてゐる存在者の本質構造に関する問ひとつとして、單にあり来つた存在者を過去的追想的に、その「何であつたか」was に於て問ふのではなくして、端的に今此処から始まる明日に於て、存在者は全

体的に何であり且つ何であらねばならぬかを、その将来する必然性に於て問ふことを意味する。キエルケゴールやニーチェが学 *Wissenschaft* に對して抱いた不信蔑視も、諸学の持つ此の将来性の欠如、過去的非生産性に對してであった。寔に学は人間実存の超越の一可能性乃至は一階程として過程的に理解されず、*an sich* に固定的なる体系を指す限り、生の無力、*décadence* 以外の何ものでもない。伝統的存在論の復活を唱へつゝも、之等実存哲学者達の伝統を受継ぐハイデガーは、学としての哲学の恐らくは最後の試みを、存在問題に於て賭けたとも言ふことが出来よう。存在への問ひは、存在者を存在者たらしめてゐる存在の本質的規定性格を、将来的構成的なるその規定の仕方に於て把握し、爾余一切の諸科学乃至は諸領域的存在論を、根源的歴史的に基礎附けようとする基礎的存在論を目指すこととなる。かくしてアリストテレス第一哲学の根本的課題、「存在者とは何か」といふ過去的追想的なる問ひは、「存在とは何か」といふ将来的構成的なる問ひによつて根本的に置き換へられた。存在論は存在者論ではなく、存在者の歴史哲学として、根源的に存在者の存在論へと転換しなければならない。かくの如き転換は然し具体的に如何にして遂行せられ得るであらうか。

存在するものは我々にとつて常に知られてゐる。然し存在するもののかゝる知の中には、既に予め存在の理解が含まれてゐる。存在者が存在するものとして知られ、我々と交渉することが出来る為には、一般に存在の理解が先行してゐなければならぬ。存在するものに就いて考へ且つ語ることの中に、即ち存在者的交渉の一切に先行して、その都度既に理解されてゐる存在は、その直接的な理解にも拘らず *begreifen* されてゐなんどのである。ハイデガーは此の直接自明的なるにも拘らず *begreifen* されてゐなし、存在の先行的理解を *Verstehen* と呼び、その獨創的具体的なる認識機能をば我々が普通に云ふ氣分 *Stimmung* に指定し、氣分的に *Verstehen* して

つある人間の在り方を、実存論的 Existential に情態性 *Befindlichkeit* と名附けた。人間も亦他の色々な存在者と共に世界の中に存在する一つの存在者である。只人間は自己の存在に於て、自己自らの存在を問題にする存在者として、その際彼自らの存在と共に諸他の存在者の存在が、その都度既に開示されて居り、かゝる存在開示的な仕方に於て存在関係的である。気分的な存在関係を可能ならしめつゝ存在する、人間のかゝる存在の仕方をハイデガーは現存在 Da-sein と名附け、之を諸他の存在者から原本的に区別する。現存在の実存と共に存在者の存在は、前存在論的存在理解に於て現存在自らに對して、その都度既に開示せられてゐる。存在理解は人間の本質を構成し、その為に基盤的存在論としての実存分析をも成立せしめるところの、「現存在の最も根源的な事實であり、「存在の意味に関する問題は、一般に只、存在理解が存する時にのみ可能である」。

然し醜い、我々が存在するものの存在根拠を問ふといふことは、如何なる意味を持つであらうか。我々の悟性認識に對しては、存在は只間接的に、存在者ではないといふ否定の形に於てしか明らかにせられなかつた。「存在は存在者ではない」といふ存在論的差異を立てることの中で、我々は存在論的な意味に於て、「存在するもの」の領域から抜け出ることとなる。存在論的差異を理解することの中で、即ち存在理解と共に我々は、存在者を越え、それを超越する。然し此の超越は存在論的 ontologisch な超越であつて、存在者的 ontisch な背後世界乃至は彼岸への超越と云つた意味ではない。超越の向ふ行先 Woraufhin をハイデガーは世界と呼ぶ、かゝる超越と共に存在者としての自己自身も越えられ、超越しつゝある *Selbst* としての自己自身に到達する。超越によつて越えられた自己は、存在者として過去的に把握可能となり、それの絶対的否定として同時に、超越的自己の自己性が自らに對して企投的に開示可能となる。超越的な自己の自己性 (Selbsttheit) の企投的な開示と共に、即ち自己並びに諸他の存在するものを越

えて行くことの中に、何が自己であり、そして何が自己でないかが區別され決定せられて、かかる區別を一義的に遂行する超越の中で同時に、自己自身は、既に越えられて過去的となつた諸存在者との、相互対立的關係へと持ち来たされ、超越によつて共に越えられたものとしての自己自身である存在者と、自己自身でない存在者とが、具体的な存在關係に於て存在することが出来る。企穀的なる超越が、存在者相互間のかゝる対立的關係を可能ならしめるのであり、自己が「ある」といふことは、存在者の真只中に存在關係的な仕方に於て「ある」といふことであり、現存在の自己性はかかる存在關係の中に全体的に現象する。明日へと向つて超越することの中で、存在するものが、曾てよりあり来つたものとしてその過去的全体性に於て、即ち存在關係的な存在者性に於て開示せられることとなる。超越の「何處へ」 Woraufhin は、かかる存在關係的な存在者が、そこに於て具体的に現象可能となる地平としての世界であり、世界の本質はその將來的なる存在の地平の先行的開示性に存する。存在者が既にあり来つた過去的なる存在の全体的顯現であるに対し、世界の世界性は、未だ来らざる未來的なる存在の、自己隱蔽的近接であり、存在の此の絶対否定的なる対立を、統一的に把持することの中に在つて現存在は、自ら実存する existieren。超越の中に又超越に依つて存在者は我々と遭遇可能となり、かかる存在者との遭遇を可能ならしめつゝ実存することの中に同時に、かかる遭遇を可能ならしめる地平としての世界が開かれて居り、此の予め開かれた世界の地平に於て、存在者は存在者としてその存在關係的な仕方に於て、具体的に現象することが可能となる。此のような存在の地平開示こそ我々が世界への超越と呼ぶものに他ならぬ。以上に於て我々は、超越的な人間存在を、前存在論的な仕方ではあるが具体的全体的に素描し得た訳である。人間の存在は本質的に現存在として、開示された世界と自己並びに自己ならざる他の存在者とが、存在關係的な仕方に於て構成的であり、ハイデガーはかかる人間の存在構造を、形式的に「世界——内

「存在」In-der-Welt-sein として規定したのである。人間の存在は世界——内——存在として、自己自らの存在と共にその都度既に世界が開かれ、存在である限りの存在の全体は、その全体的なる顯現の相に於て、即ち現象として我々に対して開示せられてゐる。

現存在の本質は、それが実存するとじふことに存し、実存の本質は存在関係的な仕方の中に於て全体的に現象し、現存在の実存のかゝる存在関係的な全体は、世界——内——存在として包括的に規定せられた。現存在が存在の全現象を包括する名称であることは、かゝる世界——内——存在の規定と共に明白になつた。今や世界——内——存在として形式化せられた現存在の根本構造が、存在するものを存在するものとして全体的に顯現せしめる、その内的可能性に關して問はれなければならない。現存在の存在論は、此のものの存在構造を、それが存在一般を可能ならしめる、その内的可能性の根拠へと目指して、解釈的に分析しなければならない。即ちかゝる分析によつて超越の内的可能性の根拠が開明されなければならぬ。実存を構成してゐる存在関係 Existentialität を、それが存在理解一般を可能ならしめる方向に於て、その可能性の根拠を目指して分析する実存性の分析論が、最早実存的 Existentiell ではなくして、実存論的 Existential であることは明らかである。換言すればかゝる課題の遂行の為には、何よりも先づ実存自らを超越の中へと翻へさなければならぬ。かくて実存論的分析論 die existentielle Analytik の課題は、その可能性と必然性とに關して、存在概念そのものの中に根差す存在論的差異を近接せしめることによつて規定せられた。

前科学的諸経験、乃至は諸科学に於て前提せられて居る根本概念、存在を明らかにする為には、存在一般の意味を規定せねばならず、存在一般の意味の規定の為には存在理解を、即ち諸科学的認識乃至は諸実践をも、自らの可能な一存在關係とする現存在の基本構造を、それが存在理解一般を可能ならしむべき、内的可能性の根拠に關して開明

しなければならない。現存在の実存論的分析論が基礎的存在論となる所似である。存在一般の意味の開明は、かくして分析し出された内的可能性の根拠からして、構成的に可能ならしめられることとなる。実存論的分析論は、存在問題解明の前段階として、総じての存在理解（存在一般の意味）を可能ならしめる地平としての時間性を、現存在そのものの分析により取り出すことを目指す。

対象の側からの上述の存在問題の規定に対応して、方法論的に、かゝる基礎的存在論は、具体的に如何にして遂行せられ得るであらうか。現存在の実存と共に存在の全体は、世界のうちに於ける存在者として全体的に現象して居り、存在者は存在しつゝ、その存在に関するその都度既に開示せられて居る。従つて分析の方法は、「自己」自らに於て自己を顯はするものを、その自己を顯はす仕方に於て、あるが儘に見させること」でなくてはならない。即ち事象そのものく Zu den Sachen selbst をモットーとする現象学的方法でなくてはならない。然し優越なる意味に於て現象と呼ばれなければならぬの、それは先づ最初に、そして差当つては自己を顯はさぬもの、自ら隠れてあるもの、然も先づ大抵自己を顯はすところのものに本質的に属して、そのものの意味と根拠とを構成してゐるところのものでなくてはならない。即ち優越なる意味に於て、その固有の具体性からして現象となることを要求するものは、現存在の存在に他ならぬ。かくてハイデガーに於ては、アレーーテーと云ふ真理概念の規定が、現象学の概念と相覆ひ、現象学は真理發顯の唯一の真正なる方法論としての意義を獲得する。然るに、先に我々が、現存在の超越論的な存在構造を、世界——内——存在として明らかにした如く、「自己自らから自己を顯はす」といふ現象学の根本的意味は、實に現存在の企投的な存在構造そのものに他ならない。現存在はその存在を自己自らから超越的企投的に理解する存在者である。かく企投的に理解するところのものを、現前化的に記述すること、それが理解の完成としての解

現存在を解釈するものは現存在そのものに他ならぬ。解釈学的現象学とはそれ故、自己解釈学的方法であり、存在企理解を、ロゴス的に完成せしめる解釈学的現象学である。

現存在を解釈するものは現存在そのものに他ならぬ。解釈学的現象学とはそれ故、自己解釈学的方法であり、存在企投的に自らの存在を自己自らによつて決定しつゝ、そこに於て存在一般の内的可能性の根拠が開示される、存在企投そのものの始源へと迫つて行く自覺存在的方法であり、更に存在一般の意味を可能ならしめる地平開示の為に、自らを惜しみなく費消してその犠牲に供する実驗的方法である。現象学とは、存在そのものの全体的開示たる現象の自己顯現、現象そのものの自己展開として、優れて現象的な現存在自らの自覺存在論である。かくて哲学は現存在の解釈学から出発する普遍的な現象学的存在論として、完全に規定せられることとなる。而も現存在の解釈学は実存する人間的存在的実存論的分析論として、総べての哲学的問題の導線を終局に導く彼処——即ちそこからして哲学的問題が発生し、そしてそこへと再び帰つて行く——、存在理解一般の内的可能性の根拠へと搖ぎ難く結びつけたのである。

世界——内——存在の超越的構造はかくて *Sich-vorweg-schon-sein-in als-Sein-bei* 「自らに先んじて内世界的に遭遇する存在者の傍らに在ることとして、既に内に在ること」と形式的に規定することが出来る。現存在の存在はその都度私の存在であり、而も分析はその端緒を、現存在の或特定の在り方にではなくして、先づ大抵といつた、最もありふれて手近に在る、無差別な平均的日常性に取る。何となればかかる在り方こそ此の存在者の、最も積極的な現象的性格を為してゐるからである。

現存在の此の構造は、その全体性に於て統一的に取り扱はれなければならない。各要素は相互不可分離の関係に於てあるが、*in-Sein* への此の統一的な見地に立つならば、各要素を夫々分離して考察するも妨げない。分析はかくて

次の如くに遂行される。

一、世界——内——存在の構成要素である、世界の世界性に就いての概念的規定。

二、世界——内——存在を自らの在り方とする存在者、人間を、その平均的日常性に於ける Jemeinigkeit に於て規定すること。

三、in-Sein の特定の在り方を窮明し、世界——内——存在を、現存在の超越的構造として統一的に規定すること。
之等の構成要素を我々現存在の独自の in Sein への方向に於て、実存論的に考察することに依つて、世界——内——存在として規定せられる現存在の全体的存在構造は、同時に必然的に明らかにせられる。in-Sein といふことが現存在の特定な即ち超越的な存在様相を為してゐることは曩に述べた。それは水がコップの中に在るとか、着物が箪笥の中に在るとかと云つた、眼の前に横はる存在者間の空間的関係を意味するものではない。現存在は超越しつゝ且つ超越の中に、世界——内——存在を構成する限りに於てのみ実存する。

前存在論的、実存的意味に解されて in-Sein いは、wohnen bei……の許に住まふ、乃至は vertraut sein……と親しんでゐるといふ意味である。従つて又世界とは、そこに於て我々が生活し、諸存在者との合目的的な交渉関係を持つ公共的世界、環境界を意味し、かかる世界に於て現存在に遭遇するものは又、單なる自然的事物存在者 Vorhandenes 云ふやうなものではなくして、より具体的全體的には有用存在者、Zuhändenes 道具 Zeug である。前者は只後者の欠如的な様相に於てのみ世界の内に発顯可能となるものであり、兩者は共に内世界的存在者として、世界——内——存在に於て現前化的に遭遇せられる。存在者は本質的に存在関係的なる内世界的存在者としてのみ現象する。環境的世界とはかかる内世界的存在者との交渉を、具体的現前化的に可能ならしめる交渉可能の地平であり、

目的的実践的な内世界的存在者とのかゝる交渉可能の全体は、その超越的ノエシス面に即して配慮 Besorge と名附けられる。道具は本質的に或物の為の或物 etwas, um zu . . . であり、此の Um-zu の種々なる在り方、有用性、便利性、貢献性等々の性格が、道具全体性 Zeugganzheit を構成する。道具の使用的交渉に於て配慮 Besorge は道具構成的な Um-zu に従属し、没入的に之を配慮することの中に、道具はその有用性 Zuhandenheit に於て、全体的に開示可能となる。「咸物の為の咸の物」 etwas, um zu . . . として指示関係的な道具全体性は、かゝるものとして指示全体性 Verweisungsganzheit によって構成せられ、之がその都度に於ける道具の具体的なる情況、事情 Bewandtnis を決定して、道具をその有用性 Zuhandenheit へと齎らす。扱然し、指示全体性がそれを日指して道具を、有用性じまや具体的に顯現する可能の根柢 Woraufhin となるものが、環境世界の世界性 Umhaft を構成する有意義性 Bedeutsamkeit である。かくて道具は環境世界の構成的歴史構造たる、有意義性 Bedeutsamkeit——道具乃至道具全体性 Zeugganzheit (ルの都度に於ける事情 Bewandtnis) ——指示全体性 Verweisungsganzheit (事情全体性 Bewandtnisganzheit) ふじふ在り方を以て、有用存在者 Zuhandenes として全体的に顯現する。

環境界に於て道具として遭遇されるかゝる有用存在者は、現存在の固有の空間性に於て近接可能となる。此の近接とは距離の測定による測られるものではなくして、有意義性を配慮する関心によつて規定せられる。道具の近接とは、道具が道具として、道具全体性に於て本質的に確立される位置を持つことを意味し、道具のかゝる依属性の彼処、其処は、道具全体の位置的依属性の可能性の制約たる、「何処く一般」 Dort——彼処——によつて規定される。即ち有意義性の統一的全体的開示の場所たる、有意義的 Da によつて決定せられる。かゝる有意義的 Da, Dort と定位するふじからして方向も亦決定せられる。現存在がその存在構造に於て、距離剥奪的 Entfernung' 方向発出的

Ausrichtung であるが故にのみ、有用存在者は、その空間的環境性に於て Zuhandenheit (近接的、帰属的) である。

現存在の存在はその都度私の存在である。然し現存在の自我性 *Selbstheit* を、凡ゆる行為と体験の変化の中に在つてもその中を貫く、恒常的、持続的なる私の主体的自我と考へることは出来ない。何となればそれは非現存在的な内世界的存在者の在り方に過ぎず、現存在は世界——内——存在そのものとして、断じてかゝる実体的、物的存在の在り方をすることは出来ないからである。世界——内——存在に於て遭遇する他人も亦現存在者 *Daseiende* であり、此の共同的な世界——内——存在を根拠として、世界は常に既に、私が他人と共に分ち合つてゐる共同世界 *Mitwelt* である。共同世界は現存在の本質的存在規定として構成的である。他人の発顯的交渉可能の根拠たる関心的配慮は、有用存在者に対する *Besorge* からの区別せられ、*Fürsorge* と呼ばれる。*Fürsorge* は顧慮 *Rücksicht* と寛大 *Nachsicht* とよびて導かれる。

平均的日常性に於ける現存在は、道具聯閥の配慮的交渉と同様、高まりゆく共同現存在への顧慮的交渉として、その都度既に「ひと」 das Man の世界である共同世界、公共的環境界に解消する。現存在がかかる世界によつて全体的に規定せられ、従つて又それに解消する時現存在は最早や自己自身ではない。平均的日常性に於ける現存在は、誰でもなし中性的な das Man であり、伝統、習慣、流行、輿論等によつて決定せられる、das Man の持つ平均性への従つて又それとの差異への顧慮に於て、その超越とは、不斷の自己逃避的自己喪失の企画として、自明的、曖昧的、現前化的なる公衆的「ひと——自己」 Man-selbst の、飽くことなき企投的実現である。かくて平均的日常性に於ける現存在は、共同世界の超越的歴史構造たる、好奇心 *Neugier*——空談 *Gerede*——曖昧性 *Zweideutig* によつてひと——自己（ひと——そのもの）として全体的に顕現する。

公衆的環境世界へと転落し、存在者へと引渡された以上の如き実存の喪失そのことは然し、世界——内——存在としての現存在の超越に基づく実存の最も積極的な可能性、平均的日常性であつた。自己喪失的、転落的にかくあることの全体は、現存在に對して開示せられてゐる。かゝる開示性がその時々の氣分 *Stimmung* に於ける情態性 *Befindlichkeit* である。ひと——自己 *Man-selbst* として自己喪失的に引渡された被投的なる自己実存は、氣分の中で、然しそれにも拘らず重荷として開示せられる。即ち被投的頽落的なる実存は、その自己逃避の飽くなき企投にも拘らず、実存の被投的根拠の無なるが故に、その都度自己のものとして引受けなければならぬものとして明らかにせられる。然じ此の様な情態性による実存の被投性の開示とゞること自身が、現存在の超越、即ち実存性によつてのみ可能であり、現存在がその根柢に於て、超越的なる実存であるが故にのみ、実存の被投的根拠が情態性に於て開示せられるのである。実存の被投的事実性がそこに於て開示可能となる、世界の超越的企投、実存の実存性を理解 *Verstehen* と呼ぶ。理解 *Verstehen* は世界企投として理解されなければならぬ。かくて現存在の *in Sein* の開示性は、その被投的過去性に於ては情態性 *Befindlichkeit* であり、企投的未来面に關しては理解 *Verstehen* であり、かくて時間的に被投的企投 *geworfender Entwurf* として、全体的現前化的に完成せしめられる現存在は、企投することとして本来的に投げ入れられてゐた存在であり、企投自身が被投的な事実性であり、現存在はそれが実存する限りかかる被投的事実的な企投に於てある。世界——内——存在を、その都度に於ける世界の世界性たる有意義性を目指して、現前化的に企画する現存在の超越は、その企投の可能の根拠を理解に於て持つと共に、その事実的根拠を情態性に於て把持し、兩者は絶対否定的なる統一に於て世界を世界せしめつゝ、世界——内——存在をその弁証法的歴史的性格に於て展開する。被投的企投といふ理解の、現前化的完成の意味を持つ解釈 *Auslegung* としての語ること、対

話 Rede は、従つて又同時にかかる弁証法的歴史世界の根源的構造そのものである。

今や然し、現存在の被投的実存と共に世界は、その都度既に平均的日常性の公衆的世界として、全体的に顕現して了つてゐる。かくて共同現存在の企投する明日の世界は、昨日の有意義的公共世界であり、明日のものは永久に昨日のものであり、昨日の如く今日も明日もとじふ千篇一律さによつて支配せられた、超越なき非創造的ニヒリズムの世界が現存するに至つたのである。……丁度正に此の時、公衆的環境世界として、存在者的に開示せられた世界——内——存在の in Sein に於て、一つの根源的出来事が生ずる。即ちそれは、被投的企投的に投げ出された、世界——内——存在を襲ふ根本的情態性、不安 Angst の生起である。恐怖の対象となるものが、Zuhändenes、Vorhandenes、Daseiende 等、内世界的に遭遇可能であつたのに對して、不安の対象は、世界——内——存在そのものの後退的崩壊として、対象の無なることに存する。之は本来、超越的、世界企投的なる現存在が、全体的に有として現象せしめられた環境世界に在つて、更にその上くと Woraufhin 田指し、越えゆくべき世界の最早や無じとじふことから、存在者的に公開せられた公衆的環境世界に、絶対否定的に投げ返され、かくて此處に安住するとじふことが又、その儘直ちに、超越的なる世界——内——存在を喪失するとじふ。世界——内——存在そのものが、不可避的に自らの中に包含する無 Nishts の近接の、実存論的根本経験を意味する。ひゞ Man の世界の中に安住することが、直ちに以て現存在の超越的実存性を喪失することであるし、さればとて之を超越しては、その向ふべき世界は無 Nishts であり、かくて被投的企投的なる二重の仕方に於て、絶対否定的に迫り来る無によつて全き浮動の状態に曝された現存在は、現前する世界を後退せしめつゝ、世界——内——存在そのものを、その事実的存有者的な近しさから解き放して之を、無にさしかけられたる純粹な可能性そのものへと持ち來たすのである。不安は現存在を世界——内——存

在可能として、その超越論的実存的構造の全体性に於て開示する。内——存在 in Sein は存在可能として、僅くに世界——内——存在可能である。然し此處に云ふ存在可能とは、現実性から程度を低められた、所謂 Wirklichkeit に對立する意味に於ける Möglichkeit ではない。それは実存論的なるものとして、現存在が存在する限り、その存在の不可能になることが絶対に不可避的であること、不可能性の絶対的可能を意味する。かくて義に、世界——内——存在の構造的統一として形式化せられた、“Sich-vorweg-schon-sein-in-al-Sein-bei” の統一的名称として、その企投的超越論的方向に於て、「関心」 Sorge といふ言葉が選ばれた訳である。

現存在は実存する限り存在可能なるものとして、不斷の残餘、das Noch-nicht に依つて構成せられてゐる。企投的超越的なる現存在は、自らの存在可能の完成を目指して、かかる残餘、das Noch-nicht の終局へと向つて企投する。然るに世界——内——存在可能の終りは死である。死は現存在者の存在可能に屬するものとして、現存在の可能的全体を限界し規定する。然し、

「、存在残餘の完成的企投は、同時に存在可能としての現存在の否定を意味しはしないか（存在論的）。

」「 das Noch-nicht の終局を為す現存在の死は然し、現存在が死に於てその終局に達した時、最早や世界——内——存在といふ存在性格を失ふのではないか（存在者的）。

之等の疑問は、只現存在の死の実存論的分析を通してのみ解答され得る。

現存在の終りとしての死は、雨が止むとか、道が尽きて了ふとかといふような、單に終つて了ふといふ終末を意味せず、又、果実が未熟の状態から発育して成熟に達するといふような、完成の意味をも持つものではない。現存在はそれが存在する限り存在可能として、不斷にその das Noch-nicht であり、死は現存在が終りに於て存在すること

を意味せず、此の存在者が「終りくの存在」Sein zum Ende、「死ぐの存在」Sein zum Todeに於て存在する」とを意味する。死は現存在が存在する限り、此のものが引受けなければならぬ。最も本源的なる存在可能である。本源的、無交渉的にしてその可能性をば追ひ越して超克し得ず、確實であつて然もその何時ともいふと関しては無規定的な、不斷なる性格を持つ死ぐの存在 (die eigenste unbezügliche, gewisse und als solche unbestimmte, unüberholbare Möglichkeit des Daseins. S.u.Z. S. 258) は「現存在を純粹なる存在可能くと活動せしめりへ、超越論的実存性に於けるその全体構造を、壓められざる統一的全体性に於て自己即ひに對して開示せしめる。死は現存在の端的な絶対的不可能性の可能性であり、その無的性格は、現存在の Sich-vorweg な存在構造に於て開示される。かくて Sich-vorweg なる超越論的存在可能を終くと向つて全体的に働かせりへ、死ぐの存在として実存する時、現在在は世界——内——存在の全体を先所有くと齎らす。曩に我々が述べた、現存在の根本的情態性として頽落的実存を襲ふ不安は、公共的世界に於ける現存在の超越論的実存性の喪失、存在忘却に對して、それ自らの無意義性の喚び起す無に依つて現存在を、その本源的存在可能くと喚びかけ、本源的な死の實存自らに對して、負目あるじとを自覺せしめたのである。喚び声の理解は「良心を持たうと欲するこゝ」Gewissen-haben-wollen であり、本源的な負目存在 Schuldigkeit の不安な死の企劃とし、沈黙的な決意性 Entschlossenheit やね。決意性は負目存在の企投的肯定とし、それ自らの中に不斷に先駆する企投的性格を持つ。かくて決意性は、その都度決意性の完成的実現たる先駆的決意性 vorlaufende Entschlossenheit である。先駆的決意性は良心の喚び声に應答する現存在の根源的行為として、世界——内——存在をその本源的存在可能たる死ぐの存在に於て、否められざる統一的全体性に於て開示する。存在一般を企投的に可能ならしめる内的可能性の根拠は、現存在の関心構造の統一的全体を、全体的に開示

する先駆的決意性の決意することの中に於て、時間性 *Zeitlichkeit* として明らかにせられる。

今や飽くなき現前化的存在企投は終焉し、本源的無交渉にしてその可能性を追ひ越し得ず、確實であつて而もその何時とじふことに関しても、無規定的に迫り来る絶対的他者、無 *Nichts* に面して現存在は、存在企投の絶対的不可能性に突き当り、超越的企投の被投的根拠たる有限性、無へと投げ返され、根拠の無なるが故にかかる有限的な被投的自己を、自らのものとして引受けつゝ、無からの又無への企投に於て本源的に在り来つたものとして、決意的に実存することとなる。存在企投の絶対的不可能性の可能性の企投に於て、根源的時間を時熟せしめつゝあく実存する現存在に對して、慰めの如き明るさを伴ふ次の問ひが、異様なる厳肅さを以て、到来する無の深淵から響いて来る。

Warum ist überhaupt Seiendes und nicht vielmehr Nichts?

現存在が、自らを絶対に否定して超越的にその外に立つ絶対的他者に直面し、その絶対否定的なる無の無性に突き当たられて、有限なる自らの存在企投の可能の根拠たる無へと投げ返され、かくて根拠は無なるが故に、無なる根拠を持つ存在企投的現存在を、自らのものとして企投的に引受けることを決意する時、茲に現存在は純粹なる存在可能に跳躍せしめられつゝ、絶対的他者たる無との間に於ける絶対的ダイアログを、モノログとして語りつゝ遂行するに至る。自らの死に於て開示される絶対的他者たる無を、「死への存在」に先駆して決意的に之を、自らの存在可能の根拠として取入れつゝ、先駆的決意性に於て実存する現存在は、かゝる存在企投の完成的解釈を目指して此處に、最も根源的なる存在と無との対話を、ダイアログ即モノログとして語らなければならぬ。超越の問題は只此の対話の一義的遂行の中に於てのみ、根源的に解答されるであらう。

世界——内——存在として規定せられた人間実存は、今や否応のない必然性を以て自らの根源、存在と無との対話

へと齎された。人間はその存在の根源に於て、存在と無との一つの対話としてあつたのであり、理解はそれ自らによつて此の対話を、根源的時間性として時熟せしめ、存在を時間性の時熟に従つて構成的に企投することとなる。存在と無との対話は、存在自らの弁証論理として、先駆的決意性の最奥の沈黙の中から、根源的時間性の時熟の形式に於て、必然性を以て語られなければならない。かくて我々は、実存の内奥深く沈黙的に語られる、存在と無との対話に耳を傾けることとなる。(続く)

註一 Nietzsche, Die Geburt der Tragödie, Reclam, S. 66.

註二 之等ギリシャ諸哲學者からの断片的引用は、何等厳密な考證に拠るほんなく、一般に使用されてゐる訳語のうちから適當と思はれるものを任意に使用した。

註三 Heidegger, Kant und das Problem der Metaphysik, 2 Aufl., S. 201

後記、本論文は四章より成るハイデガー研究の一部である。時間性よりする存在の構成といふ、ハイデガーフ哲学の根本問題を、私なりに取組んで展開したものが第四章であるが、紙数の関係上已むを得ず次号に予定することとして、本号では第三章迄を、一応之から切り離して掲載することとした。「存在と時間」第一部を始め、既刊の諸著作に於て到達したハイデガーフの立場を中心課題とする第三章迄の敍述は、それ自身、伝統的な形而上学的思惟方法を離れて、存在独自の論理を以て展開する第四章の為の、一つの予備段階なのであり、第四章の敍述を俟つて始めてその完全なる基礎附けを獲得することとなる。(一九五一、九、一一)

「本研究は昭和二十五年度本學術振興資金の補助に拠るものである」

